

# 人文学会報

No.80号  
2018. 7. 21

事務局 鹿児島市下伊敷一丁目52番1号 県立短期大学文学科研究室  
鹿児島県立短期大学 人文学会

電話(〇九九)二〇一―二二一

## 〈研究室だより〉

今号は、各教員の近況を寄せ書きしました(英文専攻の遠峯伸一郎教授は半年間の国内留学中です)。

## 授業と研究



木戸裕子

私の専門分野は平安時代の漢詩文ですが、県短の授業では、『伊勢物語』や『源氏物語』などの講読が中心です。また、ゼミでは私家集(個人の和歌集)を学生と一緒に担当制で読んでいます。その中で、最近、平安時代の女性には従来言われている以上に漢詩文の知識があるので、はと考えるようになりました。今ゼミで読んでいるのは『四条宮下野集』という11世紀半ばの女房の和歌集ですが、その前に読んでいた『小野篁集』では篁の父

が、篁の異母妹を宮仕えさせるために、篁に漢文の家庭教師をさせています。また、昨年の講義で取り扱った『赤染衛門集』でも意外なほど漢詩文を和歌の中に取り入れています。このことは今年の中古文学会で発表することができました。県短での授業が、私の研究の視野を広げ新しいテーマを発見するきっかけになっていることを実感するこの頃です。

(文学科日本語日本文学専攻 教授)

## (日本語表現法)



望月正道

ゼミでは、このところは国会図書館の歴史的音源を聞いて文字に起こし、検討するということをやっています。百年前の

日本語はいろいろ今と違っていて、刺激的です。

さて、標題の「(日本語表現法)」とは、教養科目で担当している「かごしまカレッジ教育」という妙な名称の科目のこと。県内の大学連携がらみの授業科目だったので、中身は日本語表現法なのにこんな名称なのです。が、どうも科目名称や内容の見直しが必要な状況になっているようで、今年一年掛けて他大学の状況も調べて改編案を作ろうと考えています。実は、今年度は非常勤講師の方にお願していた第二部の授業も、一年限りの約束で受け持っているのですが、授業内容を見直すようなことになればちょっと新しい方をお願いするのも難しいので、もう一年、第二部もやることになるのかも……

(文学科日本語日本文学専攻 准教授)

## ゼミの近況

土肥 克己

県短に来て苦節十一年、教育、研究にいちずに邁進してきました。思い返すと、何事もたいていの場合すんなりとはいかず、迷惑をかけたりかけられたり、現在に至るまで試行錯誤が続いています。ゼミで恒例の石碑探訪も今では十数回を数え、最近ではそのパンフレットも充実してきたので、そろそろ広告を受け付けようかと思案しているところです。漢文が読めて、道中でスイーツ、あるいはランチを食べ、しかも郷土への愛が深まるとなれば、これはきわめて教育的かつ地域密着型の活動ではないでしょうか。うら若い乙女たちが時に墓地のやぶに踏み込み、またうす暗い山道を闊歩する姿を見るにつけ、彼女たちのたくましさ、勇ましさ、心に打たれずにはいられません。こうして成長を遂げた彼女たちが卒業後、前触れなく研究室に立ち寄ってくれるのも

またひそやかな楽しみになっています。

(文学科日本語日本文学専攻 教授)

## 日本語学

楊 虹

ソーシャルメディアの登場により、誰でも自由に発信できるようになり、膨大な情報に囲まれて私たちは生活しています。こういう時代だからこそ、情報をより多角的に読む力、つまり批判的思考力の涵養の必要性がより一層高まっています。私の専門分野である語用論・社会言語学の分野においても、メディアとことばの関係を取り上げた研究が増えていきます。ゼミでは、こうした「メディアとことば」の論文を読んでことばと社会の関係について学んでいます。「ふむふむなるほどいい勉強になった」で終わらないよう、スポーツ中継の解説の日英比較や、大学生のLINEトークの分析な

ど、日常に触れることば、普段使っていることばが分析対象の論文を取り上げています。学生たちからも、「そこは違う」「私はそう思わない」といった意見が出やすくなります。こうした論文への「突っ込み」活動を通して、論理的批判的に考える姿勢を身につけてほしいと思っています。

(文学科日本語日本文学専攻 准教授)

## 近況

竹本 寛 秋

最近では自筆原稿を検討する機会が増えました。手書きの原稿には、活字の単行本では消えてしまう情報が多数含まれています。薄田泣菫の詩集『白羊宮』の原稿のほか、山村暮鳥のメモ類を写真に撮って整理し、検討する作業をしてきました。原稿用紙を簡単に検討できるようにしたのは、皮肉なことですがデジタル

機器が発達したからです。現在は安価なカメラと持ち運びサイズのハードディスクで専門的な使用に耐える写真を利用できるようになりました。一方で、膨大な量のデータがあるために、かえって何をしたらいいかわからなくなることが増えたようにも思います。学生は今、取り組む課題を「選ぶ」ことに苦勞しているようです。自由に課題を選べることは、選択の責任が自分にかかることを意味します。一つを選び、他を捨てることとは難しいことです。しかし、大学での学びは「自分のすることを自分で選ぶ」ことにかかっているのだと思います。

(文学科日本語日本文学専攻 准教授)

## イギリス文学と教育



轟 義昭

専門分野は中世英文学で、運命の女神の寓意研究と図像学的研究です。しかし

ながら、最近(約5年ほど前から)は、「大衆文化のなかのイギリス文学」を意識して、映画に用いられた英詩に着目し「文学と教育」というテーマで取り組んでいます。今年度発行される『人文』

(鹿児島県立短期大学人文学会) 第42号に「イギリス文学入門…映画から学ぶ英詩 英詩から考える映画」というタイトルで論文を掲載予定です。ここでは、小泉堯史監督の『博士の愛した数式』(二〇〇五年制作)に用いられたW・ブレイクの「無心のまえぶれ」、シャロン・マグワリア監督の『プリジット・ジョーンズの日記』(二〇〇一年制作)に用いられたJ・キーツの「秋に寄せるうた」、ジョン・マッデン監督の『恋におちたシェイクスピア』(一九九八年制作)に用いられたW・シェイクスピアの『ソネット』18番に着目しました。英詩を理解した上で映画を鑑賞すると、映画の見方に幅が広がることを述べています。

(文学科英語英文学専攻 教授)

## 教えから「学び」への転換

石井 英里子

文学科では少数派、教育学が専門です。どのようにすれば教師中心の文法訳読の英語教育から脱却し、コミュニケーションと文化を軸にした学習者中心の英語の授業が成立するかということについて研究しています。私たちの研究室の目標は「自分で自分を教育する方法を仲間と共に学ぶ」こと。教師が知識を学生にそのまま注入することはできません。学生が既に持つ知識や経験と教師が提供するものが結びつく瞬間に「学び」が実現します。ですから、私が教師としてできることは、できるだけ皆さんの「学び」が実現する環境を学生の皆さんに提供することだと考えています。例えばコミュニケーション概論の授業では英語で様々な活動を行います。論点は学生が選択します。またペアワーク、グループワークを多く取り入れ、インタラクティブな

教室環境を目指しています。教科書の内容をそのまま理解することが目標ではありません。そこに書いてあることについて、「自分はどうか考えるのか」「自分にとってどういう意味があるのか」と考える姿勢を大切に、ディスカッションを中心とした授業を展開しています。ゼミも学生の問題意識を中心に、今年は英語と観光そして教育をテーマに桜島の英語対応実態や鹿児島に来る外国人観光客の調査を行っています。

(文学科英語英文学専攻 准教授)



## 言葉を深く理解するために

小林 朋子



比較文学研究室に「居を構えて」から3年が経ちます。これまでゼミ生たち

は、1万2千字の卒業論文を提出し、次のステップへと歩み出しました。「ゴシック建築と寺社建築にみる中世の人々の心」、「グリム童話からみるジェンダーの諸相と子供像」、「生き続けるロックアメリカ音楽史におけるカウンターカルチャーの一面」。卒論の標題は多岐にわたりますが、共通して学生に伝えることがあります。それはじっくり本と向き合う時間の重要性です。芥川賞作家平野啓一郎は『本の読み方』スロー・リーディングの実践』でスロー・リーディングは「5年後、10年後のための読書」であり、それは「今日、明日という即効性があるわけではないが、長い目で見たときに、間違いなく、その人に人間的な厚みを与え、本当に自分の身についた教養を授けてくれる」と述べます。作者という名の他者と向い合うことを通して、ひとは「言葉を深く理解する技術」を学びます。それは情報化社会の中で、表面的な知識に振り回されず、十全に生きるために不可欠な技術なのでしょう。

(文学科英語英文学専攻 准教授)

## 近況報告

土持 かおり

1年次開講の「英語科教育法」の授業を担当しており、指導案や模擬授業の指導も行っている。本年度の英文学専攻の教職を履修している2年生は、全員とも熱心で、教育実習前には、授業以外にも自主的に模擬授業を行った。授業後は私からの助言の前に、生徒役の学生が意見・感想を出し合い、授業の改善策を一緒に考えていくという「英語科教育法」での模擬授業の時と同様のフィードバックを行ったが、学生達がより活発に意見を出し合っているのを強く感じた。

教育実習は5月から始まり、本年度、私が訪問した中学校は3校。特に心に残ったのは徳之島の中学校だ。授業の途中、数名の先生方が入ってこられ、活動(ライティング)の滞っている生徒の支援をされたものには少し驚いた。後で何うと、英語科ではない先生方で、そのよ

うな事は珍しくはないとのこと。「協力」という島の「ユイ（結）」の精神が教育現場にも感じられる温かみのある授業であり印象的であった。

（文学科英語英文学専攻 助教）

## 近況



田口康明

諸事情により、文学科の併任を仰せつかることになりました。教員免許状の取得に必要な科目は、大きく分けて教育学や心理学などの「教職科目」と各専門の教科に関する「教科に関する科目」の2種類に分けられます。私は、「教職科目」の中でも教育学に関する科目を担当しています。今、いろいろな観点からの教育改革が進んでいます。高校の教科の科目も大きく変わります。入試制度も変わります。なぜ、何のためにそんなことが必要なのか、学校はどう変わっていくのか。

そんなこんなを学生の皆さんと考えていく授業をすすめています。

（教職課程 教授）

## 〈学外通信〉

### 心のよりどころとなる教師に



福田美優

学校の先生は小学2年生の頃からの夢でした。当時の担任の先生に憧れ、教師を目指すようになりました。鹿児島県立短期大学を卒業後、十島村にある小宝島で2年間期限付き教師として勤務し、昨年の春、新規採用され大崎町立大崎中学校に赴任しました。

県短在学中は、四年制大学への編入や、他県の教員採用試験受験などいろいろな進路を考えていました。実際、編入試験を受けるために必要な英語検定2級を取得したり、神奈川県相模原市の教師採用試験を受験したりしました。しかし、やはり自分の生まれ育った鹿児島県で少しでも早く働きたいと考え、四年制大学へは編入学せず、期限付き教師として働くことを決めました。初めての島で

初めての仕事。社会人1年目の私は、慣れない環境に戸惑いながら、分からないことばかりの日々に必死についていくしかありませんでした。ずっとなりたかった教師として働いていることに喜びを感じるまで1か月はかかったと思います。小宝島の総人口は約60人で中学生はたった3人。教師と生徒が1対1の授業でした。悩んだこともありましたが。これでもいいのかな、と何回も自分を省みました。しかし、2年間小宝島で頑張ることができたのは、いつも温かく支えてくださる島民の方々がいたからです。1対1でも一生懸命私の授業を受けてくれた子どもたちがいたからです。そして、1年間という期限がたった教師ではなく、5年、6年と長い期間子どもたちの成長を見守ることができる正規教師になって、また十島村に帰ってきたいという思いがあったからです。

採用試験に合格したときは本当にうれしかったし、自分を応援してくれた人たちへの感謝の気持ちでいっぱいでした。しかし、採用試験に合格して終わりではありません。やっとスタートラインに立つことができただけであり、これから学ばなければならぬことがたくさんありました。初任1年目は、週に6時間の初任者研修、年に3回の研究授業がありました。また、校外における研修も多くあり、決して簡単なことばかりではありません。しかし、授業のノウハウや学級経営のあり方、生徒の心に寄り添う指導方法を、詳しく丁寧に学ぶことのできる貴重な1年だったと思います。大崎中学校は全校生徒約三〇〇人、教師数約30人の中規模校です。今までの1対1での授業とは違って、36対1の授業です。とにかく教材研究をしっかりと行いました。「分からない」と言われれば授業のやり方を変えてみたり、先輩先生の授業を見学させてもらったりしました。初任1年目であっても生徒にとっては1人の先生です。授業を受ける生徒全員に、学ぶ楽しさを知ってもらえたらいいな、という気持ちを持たせたいようにしています。初任1年目を終え、今年の4月から1年生の担任をさせていただいています。初めて

の学級経営は思った以上に大変ですし、うまくいかない時もあります。しかし、毎日が充実しており、学校に行って子どもたちと会えるのが楽しみです。今日の朝の会ではどんな話をしようかな、と考へながら通勤するのが私の日課になっています。学級経営をする中で身に染みて感じたことは、常にアンテナを高く張り巡らせ、子どもたちの小さな変化にも気付くことができなければならない、ということだと思います。これからも生徒の心のよりどころとなれるような教師を目指します。そして教育への情熱と、子どもへの愛情を持ち続ける教師でありたいです。

(平成二十六年三月 日本語日本文学専攻卒業)



## 想いをカタチにする仕事



鮎川 侑香



株式会社マコセージェンシーに就職してはよいもので三年目、長かった、というよりあつという間だったという表現がびつたりの歳月でした。それは一日一日が私にとって「初めて」の連続だったからです。

私はご葬儀でお配りする「会葬礼状」の一枚の中に、故人様の思い出話をまとめる、という仕事に携わるオペレーター部署に所属しております。ご遺族様に五分ほどお時間をいただき、お電話で聞き取った取材内容をもとに六〇〇字ほどおまとめします。時間が限られる葬儀の場面において、スピードはもちろんのこと一人ひとりの心に寄り添うべく、心温まる一枚が必要とされ、そしてミスは絶対に許されません。

最初は業務についていくだけでいっぱ

いっばいで、一日一日がとてもはやく感じたことを覚えています。しかし、先輩方の素晴らしい文章にふれ、また色々なご遺族様とお電話越しではありますがお話をしていくうちに、私もいちオペレーターとしてもっと責任をもって仕事と向き合わなければ、と思うようになったのです。

ご遺族様は、様々な形で悲しみを乗り越えようとされています。お怒りになる方もいらつしゃれば、涙を流され、お話しも難しい状況にある方もいらつしゃいます。終始和やかに、まるで我が子に思いう話を語り聞かせるように「あの頃はこうだった」と嬉しそうにお話してください方もいらつしゃいます。また、事故で突然愛する人を失ってしまう、小さいお子様を失ってしまう……。ご遺族様の無念さは筆舌に尽くし難いでしょう。一番切実な方を亡くし、悲しみに暮れる方の心に寄り添い、少しでも前を向く手助けができたならと、毎日、受話器を置いた後にパソコンに向かっております。

私は昨年の四月に祖父を亡くし、遺族

という立場を経験致しました。祖父の会葬礼状は私が担当しました。母や祖母に話を聞き、私の知らない祖父の表情も見えました。祖父が大好きだった桜が散る中、葬儀が執り行われ、私の会葬礼状が式中に読み上げられたのですが、自分が書いたものだったにもかかわらず 祖父の面影が甦り、涙が溢れて止まらなかったことを覚えています。そのときに初めて私はこの仕事の素晴らしさを実感致しました。

文章を書いた後、ご遺族様からお褒めの言葉をいただくことがしばしばあります。「ありがとう」「二〇〇%の文章だったよ」「自分が書いたみたいだ、すごい」……その一言一言に力もらいながら仕事に励んでいます。また、中には一枚の礼状をお守りのように持ち歩いている方もいらつしゃると聞きました。

楽な仕事ではないですし、つらいと感じることもあります。その先にあるのはご遺族様が涙を拭いて明日へ歩める糧になりたいという想いです。お電話でお話を聞くことしかできませんが、その五

分間で誰かが救われるかもしれない、私  
が書いた文章で誰かが笑顔になるかもし  
れない、喜んでくれるかもしれない。

「想いをカタチに」する、マコセだから  
こそできる仕事です。

〔平成二十八年三月日本語日本文学専攻卒業〕

## 日本とアメリカでの 学生生活で学んだ 優先順位

足立 真俊

私は二年前の二〇一六年に文学科英語  
英文学専攻を卒業した後、同年九月にア  
メリカにあるウイスクンシン州立大学リ  
バーフォールズ校（UWRF）に編入  
し、今年五月に卒業することができまし  
た。アメリカで過ごした年月は二年にも  
及びませんでした。苦難の連続でそれ  
以上のように感じています。というの  
も、アメリカでの学生生活は日本のそれ

とは大きく違ったからです。一番分かり  
やすい例が食生活ではないでしょうか。  
アメリカでは、日本で毎日口にするよう  
にお米を食べることはできませんし、日  
本で食べていた料理と出会うことができ  
ても味付けが何か物足りなく、とても苦  
劳しました。

学業においても大きな違いがありまし  
た。例えば日本の講義では、講師が教壇  
に立ち続ける一方で、学生は座ってひた  
すらノートをとるといふ座学になること  
が多いと思います。しかし、アメリカの  
講義ではディスカッションやスピーチ、  
プレゼンテーションなどを通じて学生が  
主役となることが多く、そうした講義の  
スタイルの違いにも適応しなくてははい  
けませんでした。また、講義において課さ  
れる課題も大きく違いました。教科書の  
予習やレポートの提出など一見日本と変  
わらない課題が課されましたが、その量  
は日本の比ではなくらいに多く、今思  
い返してもよくあれだけの量をこなすこ  
とができたと思うくらい量の差でした。こ  
うした違いを乗り越えることができたの

は、この鹿児島県立短期大学で優先順位  
をつけることを学べたからだと思いま  
す。その学びを育めたのがTOEICへ  
の取り組みです。

UWRFに直接編入するには、TOE  
ICという英語のコミュニケーション能  
力を測る検定において、卒業までに一定  
のスコアを取得する必要がありました。  
一年次から私は幾度となくTOEICを  
受験していましたが、二年生になるまで  
に取得していたスコアでは不十分でし  
た。そのため、スコアを伸ばすためにT  
OEICの対策をする必要がありました  
た。当時の私にはそんなことをしている  
時間はないように見えました。というの  
も、学業とアルバイトの他にサークルや  
自治会、そしてボランティア団体と、  
様々な組織の一員だったからです。さら  
に、二年次にはそれぞれの組織において  
代表や部長など責任のある役割を務める  
こととなり、色々なタスクを課されて一  
層時間がなくなっていました。このまま  
ではいけないと考えた私は、TOEIC  
に費やす時間をつくるために優先順位を

つけ始めました。期日や量を基にして与えられたそれぞれのタスクに優先順位をつけ、一つ一つ集中して取り組むことで、TOEICに対策する時間を少しずつつくっていくことができました。また、過去のTOEICのスコアシートを見返して、対策内容にも優先順位をつけていきした。そうすることで克服しやすいポイントから対策することができ、短期間でスコアを伸ばせると考えたからです。こうして優先順位をつけていった結果、文化祭や学祭などの自治会活動とボランティア活動が重なって最も忙しかった十一月に十分なスコアを取得することができました。

アメリカで莫大な量の課題を目の前にしたときも、同様に優先順位を明確にして効率よく取り組んだおかげでついていくことができました。編入当初はその量に驚き戸惑っていましたが、この短期大学での経験を活かして少しずつ時間に余裕をつくっていくことができました。そうして得た時間を講義の予習や料理などに費やし、冒頭で述べたアメリカと日本

の学生生活の違いに適応していくことができました。こうして優先順位をつけることを学べたからこそ、困難を乗り越えてアメリカでも充実した学生生活を送ることができたんだと思います。私はこれから社会人としての道を歩み始めますが、社会に出れば学生時代の比ではないようなタスクを課され、さらに時間が限られるかもしれません。そんなときには日本とアメリカ両方での学生生活を思い出して、一つ一つ優先順位をつけて効率よく取り組むことができればと思います。

(平成二十八年三月 英語英文学専攻卒業、同年八月 米国ウイスコンシン州立大学 コミュニケーション学科編入)

## アナウンサーを目指して

坂上 由莉

皆さんは、夢や目標はありますか？「絶賛夢追い中です！」という方もいれば、「今これといったものはない」という方もいると思います。少なくとも幼い頃は「ケーキ屋さんになりたい」「モデルさんになりたい」など夢に思いをはせていたことがあるのではないのでしょうか。でも、夢を現実にするって難しいですよ。楽しいことだけじゃなく、時にはリスクや大変さを伴います。それでも、私の周りには夢や目標に向かってまっすぐ頑張っている人達がいいます。そんな県短英文の環境に刺激され、私も夢を追い続けることを諦めませんでした。

私の夢は、アナウンサーになること。「朝起きたくない」「学校に行きたくない」と感じていた中学生の頃。いつものようにしぶしぶ起きてリビングに行く、テレビの中で朝から爽やかなアナウンサー

の姿がありました。その姿をみると自然と明るい気持ちになりました。それ以来、毎朝テレビに映るアナウンサーに会いに行くことが楽しくなり、いつしか憂鬱な朝から楽しい朝に変わっていった。また、おすすめの店が紹介されれば行ってみたくなる。私もポジティブな気持ちを与えられるアナウンサーになりたいと思うようになりました。

中学生の頃から夢見ていたアナウンサー。これを目指して取り組んできたことが二つあります。一つ目は、四年制大学への編入学。アナウンサーになるには、多くの場合四年制大学の卒業資格が必要になります。というところで、迷わず編入学を決意しました。先生や友達への支えがあり、なんとか鹿児島大学法文学部人文学科に合格。そして、大学生活を始めて1年半。最初の頃は、かなり大変でした。特に、人間関係と勉強。大学や学部学科によりますが、私が編入したコースでは編入生は私だけ。入学当初は、学内に頼れる友達も先生もいませんでした。また、本来同級生にあたる3年生は、あまり授

業をとっていないので会って話す機会がありません。思うように友達ができませんでした。あとは、専門分野の勉強。実は、大学ではいままで学んだことも興味もなかった分野を専攻することになりました。「新たな事を学べて楽しいかも」と思っていました。しかし、この興味は湧きませんでした。しかし、これら大変さは次第に薄れていきました。今では、定期的に飲み会に行ったり、くだらない話をし合う友達ができたり、授業が楽しいと感じたり。とても充実した大学生活を送っています。環境が変わると大変なのは当たり前ですよ。

そして、アナウンサーを目指して取り組んでいることの二つ目は、かごしま親善大使です。簡単に言うと、鹿児島の魅力を県内外でPRをする活動です。アナウンサーと同じ伝える仕事ということで何か将来に役立つかもしれないと思い応募しました。かごしま親善大使になって、もうすぐ2年。この活動を通して、人に何かを伝える時一番大切なのは「気持ち」だと学びました。ステージで、覚

えた文章をそのまま読むと棒読みになってしまい人に伝わりにくいPRになってしまいます。気持ちを大切にするようになって以来「あなたのPRを聞いて鹿児島に行きたくなった。」と言ってもらえることが多くなりました。素直な気持ちをもって話せば、言葉に魂が入り相手の心に届くPRになるのです。

アナウンサーを目指してやってきた大学編入とかごしま親善大使。ここでは書ききれませんが多くのリスクや大変さがありました。しかし、これらを通して素晴らしい出会いと経験を得ることができました。夢を追うって確かに大変なこともある。それでも、アナウンサーを目指して日々奮闘しています。皆さんもぜひ夢や目標を持ってみてはいかがでしょうか。

（平成二十九年三月 本学英語英文学専攻卒業  
同年四月 鹿児島大学法文学部人文学科編入



# 彙報

## ◎人文学会行事日程

二〇一七年

四月二十一日 総会・役員交代

(全員留任)

(会長) アダメック

(評議員) 望月、楊、土持

(会計監査) 小林

十月三十一日 『人文』 第41号発行

二〇一八年

三月十六日 「会報」 第79号発行

四月二十日 総会・役員交代

(会長) 木戸

(評議員) 望月、石井、土持

(会計監査) 楊

七月二十一日 「会報」 第80号発行



## 2016、2017年度 人文学会決算報告書

収 入	2016年度	2017年度
前年度繰越金	542,845	467,866
学生会員会費	66,000	75,000
教員会員会費	0	24,000
預金利息	96	19
収入計	608,941	566,885
支 出	2016年度	2017年度
「人文」送料	27,375	21,840
会報印刷費	35,856	47,898
封筒・ラベル等	4,844	3,382
入会案内コピー代	-	400
卒業記念品	73,000	67,000
支出計	141,075	140,520
次年度繰越金	467,866	426,365



※2017年度の教員会員会費は2年分です。

◎教員人事

区分	職名	氏名	異動年月日	備考
〃	教授	丸山 容爾	29・3・31	生活科学科 生活科学専攻
採用	講師	山口 祐司	29・4・1	商経学科 経済専攻
〃	助教	大松 伸洋	〃	生活科学科 生活科学専攻
昇任	教授	土肥 克己	〃	文学科 日本語日本文学専攻
〃	〃	坂上ちえ子	〃	生活科学科 生活科学専攻
〃	准教授	山下三香子	〃	生活科学科 食物栄養専攻
〃	〃	北 一浩	〃	生活科学科 生活科学専攻
退職	教授	フリッツ アダメック	30・3・31	文学科 英語日文学専攻
〃	准教授	倉元 綾子	〃	生活科学科 食物栄養専攻
昇任	教授	宗田 健一	30・4・1	第二部商経学科
〃	准教授	岡田 登	〃	商経学科 経済専攻

《編集後記》

『会報』は、秋と春の年二回発行していましたが、秋は『人文』論集と重なることもあり、今年は夏休み前のオープンキャンパスに合わせて発行することとしました。

『人文学会報』は文学科ホームページ（<http://www.k-kentan.ac.jp/ht/>）に掲載しています。『人文』の方はKARN 鹿児島県学術共同リポジトリの運用が終了し、鹿児島県立短期大学リポジトリ（<https://k-kentan.repo.nii.ac.jp/>）での公開に変わっています。

（望月）

